

(4) 土坑覆土中の焼土検出動物遺存体について

P-20・53の覆土上部の焼土、P-51の覆土中位の焼土、P-21の覆土中位から焼骨が検出された。焼骨は、水洗選別により得られたものである。各遺構は後期前葉の土坑墓とみられ、いずれもプラスコ状を呈する。焼土は二次堆積物であり、P-21の焼骨は土器とともに散在していた。

これら試料について、金子浩昌氏に同定していただいたところ、P-21試料は鳥骨片11点、鳥類(アビ大) 基節骨遠位端1点、サケ歯骨片2点、ニシン椎体片1点、魚骨片2点、魚類鰓棘・肋骨多数、P-51試料は魚骨片5点、鳥骨片1点、P-53試料はサケ?椎骨片1点と判明した。

土坑墓とみられる土坑の坑口に焼土が見られる例は各時期に類例が知られる。今回のように動物遺体が検出される例も多いと思われるが、積極的な水洗選別により類例の増加が期待される。(福井)

付編 八雲町野田生1遺跡における「環状を成す可能性のある礫群」について

八雲町野田生1遺跡は平成12、13年に発掘調査が行われ、14年度に当センターより報告書が刊行された遺跡である((財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第183集)。調査結果において縄文時代後期中葉を主体とする集落跡が確認され、堅穴住居跡から完形の赤彩土器や漆塗りの櫛などが出土したこと、その良好な保存状況が注目された。

調査は噴火湾に面して突きだした海岸段丘を東西に横切るかたちで行われたため、後期の遺構が集中する緩斜面部分と遺構、遺物の少ない上部平坦面との差が明瞭にあらわれるという結果が見られた。

この中で「環状を成す可能性のある礫群」は遺構、遺物の少ない上部平坦面において確認された。その分布範囲は調査区J～Q-67～72グリッド周辺で、約40m四方の範囲内に分布する。調査当初においてはその分布状態にまとまりや強い傾向も認められず、さらに遺物包含層の堆積が薄く、最近の搅乱による移動の可能性が考えられたため、配石として明確な位置づけができなかった。結果的に報告書での掲載を控えたが、刊行後に道南地区で環状列石や配石遺構の出土例が数多く報告されるに及び、「可能性」の段階であるが二次的な資料として利用可能な面があると考え、このようなかたちでの報告となった。

この「礫群」は2種類のタイプに分類することが考えられる。1つは直径約10mの円形をかたちづくるよう配置されたと考えられるもので、調査区L～N-68～71グリッド内に位置する一か所である(A)。これは後期中葉の堅穴住居跡BH23を中心にして半径5mの円を描くようにして配されたと考えられるもので、推定範囲の東半分には礫群が集中し、西半分にはほとんど残っていない。さらにもう一つは明瞭な円形を示すものではないが、直径1～5mの範囲内に3～5点ほどの礫が集中するタイプで、これはAの礫群を取り巻くように10か所以上で確認された。

いずれのタイプの「礫群」も大半が長径0.5～1mほどの安山岩の長円礫から構成され、割れたかたちを呈するものが多く見られた。また、その下部においても明瞭な掘り込みなどを確認することができなかった。具体的な時期については周辺の包含層の遺物分布状況、遺構分布などから判断して、縄文後期前葉「トリサキ式」期の可能性が考えられる。

この「礫群」の位置づけについては、縄文後期中葉の遺構、遺物が少ない平坦面部分に立地することから、後期前葉の時期に配石がなされ、周辺にいくつかの土壙墓(CP76、CP77など)が築かれた後、後期中葉以降においても集落の中の広場にあたる空間として利用されていたものと考えられる。

(藤井)

